みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

クリスマスツリーと家族 (私のスケッチ・ブック (23))

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-03-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 森, 明子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00005906

私のスケッチ・ブック(23)

クリスマスツリーと家族

国立民族学博物館 助教授
森　明子

■ツリーの飾り

11月になると、ヨーロッパの都市はクリスマスの準備を始める。楽しみのひとつはデパートのショーウィンドウで、ベルリンで名高いカーデーヴェーは、とくに見ごたえがある。私が都市文化の厚さを感じるところである。2年ほど前に見たときは、19世紀以来現在にいたるまでのツリー飾りを再現していた。それはベルリン市民の歴史を垣間見るような楽しい展示だった。

たとえば、ガラス球が使われるようになったのは20世紀初頭で、その当時、薄いガラス球は、たいへん高価なものだった。彩色されたガラス球の色調は、えもいわず柔らかい。ガラス球の前身はリンゴの果実である。100年ほど前、裕福な資産家が財にものをいわせて、リンゴを高級なガラス球にかえたのである。

図1　高級デパート、カーデーヴェーの定評あるクリスマス・マーケット。
高級なガラス球が輝いている。

1960年代になると、工場の大量生産によって安価な球がつくられるようになり、それがまたたくまに家庭に普及した。金、銀、赤、緑などの極彩色の球をぶらさげた庶民的なクリスマスツリーは、ほぼ同じ時期、日本に流行したものと似ている。その後、ガラス球は再び高級化し、吹きガラス製の美しい製品が出回っている。

銀色の細いモールを天使の髪に見立てて、ツリーに飾るのをラメッタといって、ずいぶん流行した。だが、これも現在では流行おくれになった。材質がアルミニウムで、環境保護の立場から望

ましくないし、ツリーの枝にからみついて、クリスマス後のごみ処理にも不都合を起こすからだという。1960年代、高度経済成長期のドイツで、ツリーは極彩色の球とラメッタに、豆電球の電飾も加えて、ピカピカと光っていた。豆電球の明るい光は、当時たいへんモダンなものとされていた。この反動が、1970～80年代にくる。伝統的なものが好まれ、藁細工で天使や星をかたどった飾りが流行した。明るすぎる光は流行遅れとされて、ろうそくに近い、落ち着いた光が好まれるようになる。

これらのほかにも、ブリキ製の飾りが流行した時期もあったし、木彫りの飾りが流行した時期もある。戦争中は、兵士をかたどったモチーフもあった。

ツリー飾りの変遷は、工業化、戦争、大量生産や環境保護といった、19世紀から20世紀にわたる経済や社会の動向を映し出している。

■家族で祝うクリスマス(1960年代)

歴史の中のクリスマスツリーが時代の空気を投影するように、家庭のクリスマスツリーは家族の歴史を映し出す。

プファルツ地方出身のヴォルツ家を紹介しよう。1920年代初頭に生まれたお父さんは、大学で化学を修めた博士で、化学工業関係の大企業に勤めた。転勤が多く、ロンドン、東京、ニューヨークで暮した経験もある。クリスマス休暇にプファルツに帰郷することもあったし、赴任地でクリスマスを祝うこともあったという。1960年代当時の故郷でのクリスマス休暇について、現在40歳代になった息子に聞いた。

両親は故郷のプファルツ地方に住まいをもっていて、1.5kmくらい離れたところに、母方の祖父母と未亡人の大叔母が住んでいた。クリスマスは、この家族が集まって、ともに祝った。聖夜の夕方は、教会のミサにみんなで出かけて、帰宅後、クリスマスツリーを囲んでプレゼントを開いた。プレゼントは、この時まで包装してツリーの根元に置いてある。そのあと夕食で、ガチョウのローストなどのご馳走を食べた。

翌25日は、11時に父の友人を訪ねることになっていて、そこではワインとクッキーを出された。帰宅してから、家族で昼食をとった。翌26日も祭日だった。

■家族の歴史とクリスマスの飾り

さて、家族のもとにあるクリスマスの飾りは、毎年その時期に出して飾り、済むとふたたび箱に収めて、翌年までしまっておく。日本でも同様だが、その感覚はお雛様に近いと思う。というのも、ツリーの飾りが少しずつ増えていくのを楽しむふうがあるからだ。

時間をかけてたまっていった飾りの全体は、流行という側面から見れば、ごちゃ混ぜである。だが、ツリーの飾りはその年ごとに選んで飾るもので、調和よく新しいものと古いものを合わせていくのだそうだ。相性のいい飾りを選んで、美しいツリーを演出するのは、飾る人の腕の見せどころである。

一方で、ごちゃ混ぜの飾りを入れた箱を、年を経てあらためて眺めてみるのも楽しいものに違いない。飾りのひとつひ

とつに思い出が結びついていて、そこに家族の歴史を垣間見るからだ。

ヴォルツ家に現在ある飾りのほとんどは、1970～1990年のあいだに、南ドイツやオーストリア、北イタリアなどを旅行したときに買ったものだという。訪れた先で気に入った飾りを見つけては買っているうちに、自然に増えていった。手作りのものも含まれている。

いくつか例をあげよう。藁細工の飾りのモチーフには、星・ハート・鐘の形のほかに、アドラントというギリシアの異教的人物のものもある。そうかと思うと、合成樹脂の長靴や、木でリンゴをかたどって彩色した飾りもある。モチーフは、いずれも古い時代から受け継いだものであるが、地方色ゆたかで、さまざまな材質や制作方法のものが混ざっている。

胡桃の実に紐を通した飾りは手製である。折りたたみできる高さ約15cmの木枠は、父がスキー旅行に行ったときに、卓上でツリー飾りをかけるために工作した。丁寧に緑色に塗ってある。モミカサは森でひろったもので、1960年代から毎年、待降節のろうそくに添えて飾っていた。

図2　ヴォルツ家ニューヨーク時代のクリスマス（1962年）。
ツリーからたれているのがラメッタ。

ヴォルツ家ではいつもお母さんがツリーを飾っていたという。10年前にそのお母さんが亡くなると、お父さんも息子も、家でクリスマスを祝う気持ちをなくしてしまった。それで、これらの飾りも、10年間、箱の中に眠っていた。

■家族の成長とクリスマス（2000年代）

クリスマスは家族の祭りである。それはちょうど、日本のお正月が家族の祭りであるのと対応する。家の掃除をし、ご馳走をつくって、家族がゆったりと過ごす。家族が集まるところに飾るクリスマスツリーにあたるものはないかと、門松を思い浮かべたが、趣がだいぶ違う。

お母さんが亡くなって、ヴォルツ家からクリスマスツリーは消えた。そのかわりに、お父さんは息子夫婦とともにクリスマスを祝うようになった。

ヴォルツ家の一人息子は、現在ベルリンに住んでいる。妻はミュンスター出身で、子供はない。夫婦はこの10年ほど、クリスマス休暇を妻の故郷で過ごすのを恒例にしている。ベルリンの住まいに、クリスマスツリーは飾らない。

つまり、クリスマス休暇には、ベルリンの夫婦とプファルツに住む夫の父が、ミュンスターを訪れるのである。ちなみに、広いドイツのベルリンは東の端、ミュンスターは西の端、プファルツははるか南に位置している。ふだんは遠く離れて生活している複数の家族が、クリスマスの期間だけ集まって、ひとつの拡大家族になるのだ。

「クリスマスをともに過ごす人々は家族であり、家族はクリスマスをともに過ごす」という意識が、ヨーロッパの人々にはある。それは、私たちのお正月と同様である。ふだん一緒に生活していなくても、家族が集まるべきときとところは、意識の中に確保されている。ただしこの拡大家族も、やがて老いていく。クリスマスツリーは、この成長する拡大家族の核として位置づけられる。

現在、ヴォルツ家の人々は、クリスマスを次のように過ごすという。

21日　ベルリンの夫婦がミュンスターに到着。

22日　プファルツの父がミュンスターに到着。ベルリンの夫婦は、ミュンスターの古い友人たちと過ごす。

23日　買い物。妻の弟が到着。

24日　教会のミサに家族そろって出かける。帰宅してからプレゼント交換。ミュンスターの母の料理。

25日　男性２人（ベルリンの夫・妻の弟）の料理。

26日　弟の恋人が訪問。レストランで食事。博物館見学、散歩、友人との再会など。

27日　プファルツの父が帰宅。

21日から26日の行動は毎年恒例である。25日に2人の男性が料理することも、拡大家族のクリスマス行事のひとつで、「今年のメニュー」は前菜からデザートまで、白と赤のワインの銘柄も合わせて、すでに11月のうちに決まっていた。27日以降は年によってさまざまで、ベルリンの夫婦が大晦日をミュンスターで祝う年もあるし、ベルリンで祝う年もあるという（ドイツでは新年よりも、「大晦日深夜12時をどこで祝うか」が焦点になる）。

この拡大家族は、ミュンスター在住の年長夫婦を中心として、その子供の家族を主要構成要素とする。プファルツの父が加わったのは母が亡くなってからのことで、家族が老いたことによっている。弟の恋人は一緒に住む仲だが、彼女は例年26日になってから合流する。自分の両親のもとでクリスマスを過ごすためで、彼女は目下のところ拡大家族の境界上のメンバーといえよう。

ベルリンの夫婦も、家族としてみれば若い。彼らに子供があれば、ベルリンの住まいにもクリスマスツリーが飾られるだろうし、子どもが成長すれば、ベルリンのクリスマスツリーのもとに、拡大家族が構成されることも考えられる。プファルツやミュンスターの老人がそこを訪問することもありうるのだ。

こうしてみて、あらためて、クリスマスツリーが、ドイツの家族の核に位置づけられることが、理解できるのではないだろうか。年長のヴォルツ家（プファルツ）では、クリスマスを仕切っていたお母さんの死とともに、家族の核が次の世代へと移ったのである。その核が、目下のところミュンスターにおかれている。

さて、箱の中に眠っていたヴォルツ家のツリーの飾りは、お願いして一式として国立民族学博物館に譲っていただいた。いずれ展示して、日本の人々に見てもらいたいと思っている。